

令和6年度 第2回
函館市子ども・子育て会議
会議録（要旨）

日時 令和6年(2024年)8月26日(月)
午後6時30分～
場所 函館市役所8階大会議室

1 出席者

(1) 委員 19 人

- 天野委員 (函館保育協会)
池田委員 (函館大妻高等学校)
石坂委員 (函館市医師会)
数又委員 (函館市民生児童委員連合会)
川村おさむ委員 (函館市私立幼稚園協会)
木村委員 (函館市社会福祉協議会)
高野委員 (函館市ファミリー・サポート・センター)
高橋委員 (連合北海道函館地区連合会)
館山委員 (公募)
玉利委員 (道南地区私立幼稚園連合会)
成田委員 (公募)
西村委員 (函館商工会議所)
野口委員 (函館市小学校長会)
畑委員 (函館市町会連合会)
浜委員 (北海道函館児童相談所)
本田委員 (函館大学)
山口委員 (函館市中学校長会)
山崎委員 (函館市PTA連合会)
吉増委員 (函館市学童保育連絡協議会)
欠席：川村幾代委員 (函館短期大学)

※ () 内は所属団体等

(2) 事務局 7 人

宿村子ども未来部長，東出子ども未来部次長，蒲生子ども企画課長，
平野子どもサービス課長，大坂子育て支援課長，田中子ども見守り・相談課長，
高橋母子保健課長

(3) 傍聴者 3 人

2 配布資料

- 資料 1 計画の基本理念等 (案)
資料 2-1 具体的な施策の展開 (案) 前編
資料 2-2 具体的な施策の展開 (案) 前編 個別事業
資料 3 「計画の基本理念等」および「具体的な施策の展開」の協議方法について
資料 4 令和 6 年度第 1 回函館市子ども・子育て会議での意見等に対する市の考え方

3 会議録

発言者	発言要旨
-----	------

1 開会

【事務局】 (開会宣言)

2 議事

- (1) 計画の基本理念等（案）について
- (2) 具体的な施策の展開（案）前編について

【池田会長】 それでは、早速ですが議事を進めさせていただきたいと思いをします。

本日は、Aグループ、Bグループに分かれてグループワークを行うということです。それぞれの施策についての協議を行っていただくかたちになっております。

それでは、議事の「(1)計画の基本理念等（案）について」、
「(2)具体的な施策の展開（案）前編について」一括して事務局から説明をお願いします。

【事務局（蒲生課長）】 （資料1，資料2－1，資料2－2，資料3に基づき説明）

【池田会長】 内容について質問があればお受けしたいと思います。玉利さん何かありますか。

【玉利副会長】 これまでずっと続いてきた基本理念の「すべての子どもたちが輝き ばかりにあふれるまち はこだて」についてですけども、これをこのまま続けていくと、今問題となっている少子化対策にも良い方向に向かうという考えなののでしょうか。函館市こども計画をこれからつくるにあたって、今いる子どもたちの幸せを考えなければならぬけれども、未来の函館市の子どもたちも輝けるまち、そして元気に過ごすまちということであれば、そろそろ見直しても良いのかなという思いもありますが、いかがでしょうか。

【事務局（蒲生課長）】 いただいたご意見を踏まえて修正することを検討いたします。少子化、人口減少対策については、こども計画はこども基本法、子ども・子育て支援法、次世代育成支援対策推進法などに基づくものになっておりまして、計画の内容については、少子化対策や人口減少対策に資するものと考えておりますが、一般的な人口減少対策であれば函館市人口ビジョンや函館市活性化総合戦略があり、今年度、企画部において、次期活性化総合戦略を策定することとなっておりますので、人口減少対策についてはそちらの方で主として扱っていくものと考えております。

【玉利副会長】 ある程度分けて考えるということですか。

【事務局（蒲生課長）】 例えば少子化に関しては基本的な視点「7 結婚・妊娠・出産・育児の切れ目のない支援の視点」で少子化の進行について記載しているところではありますが、少子化対策そのものを理念とすることは、他の計画がよろしいかなと考えております。

- 【池田会長】 他にありますか。高橋委員どうぞ。
- 【高橋委員】 資料2-1の4ページに、放課後児童クラブの状況の推移が経年で出ているんですけども、支援が必要な子どもたちの中には放課後等デイサービスの方にいる子どもたちも相当数いるとは思っているのですが、ここには入っていないということでしょうか。
- 【事務局（蒲生課長）】 放課後等デイサービスについてはここには入っておりません。
- 【高橋委員】 純粹に放課後の学童保育所に通っている子どものパーセンテージということですね。わかりました。
- 【池田会長】 木村委員どうぞ。
- 【木村委員】 理念自体が行動計画からの引き続きということですが、その前のエンゼルプランから行動計画を地方でつくるようになって、今、こども家庭庁のこども大綱には少子化対策も含まれていると私は思っています。市で少子化対策は別な所でやるからここは違う意味でというものなのか。なぜこれをしていくのかという部分では、やはり人口減少の部分も含まれるのだろうと思いますけれども、これから生まれる子どもたちも輝けるまちづくりという意味ではやはり少子化対策も議論するのが普通なのではないかという思いをしているんですけどもいかがでしょうか。
- 【事務局（宿村部長）】 貴重なご意見ありがとうございます。木村委員がおっしゃったとおり少子化対策につながる取組みであるということは十分私たちも認識しております。子ども・子育て支援という観点、それから若者支援という観点で、これまでとぶれないかたちで元々の「ひかりのおくりもの」という市の考え方に基づいた基本理念ということで継続したらどうかという案は出させていただいております。これで決まっているということではありませんので、今の意見も踏まえながら議論を深めていって、場合によっては修正をしていくことも十分考えられると思っておりますので、ご意見として伺いしておきます。
- 【池田会長】 これはまだ案ですので、皆さんの貴重な意見を伺いながらより良いものに仕上げていくということになりますので、もし意見があればどんどん発表してもらいたいと思います。
それではグループワークの方に入っていきたいと思います。グループで人数も少ないですので、活発な意見を出していただければと思います。よろしくどうぞお願いいたします。

(グループ協議)

※グループ協議の詳細については別紙1・2に記載

【池田会長】

それではみなさんお疲れ様でした。両グループのまとめが終わったと思うので、Aグループの玉利副会長から発表をお願いしたいと思います。

【玉利副会長】

短い時間でしたけれども積極的に委員の方全員が発言されて協議いたしました。基本理念、地域における子育て支援サービスの充実、保育サービスの充実の3つに分けて話しました。

まずは理念の部分です。このような意見が出ましたというものを発表したいと思います。

「市民全体が輝かないと子どもたちが輝けない。少子化が進んでいく。理念の中に、自分たちのまちに誇りをもって住んでいけるかを考えるべき」ということで、函館市こども計画とはいえ、子育てに関わる大人たちも輝く必要があるのではないかとこのことを理念に入れてほしいという意見がありました。

「人を育てて人を育むということを考えなければならない」「函館市民が住んで幸せと思えることが必要」「子どもも大人も夢や希望をもっていけるというニュアンスが入って来るとメッセージ性が強くなる」「大人が隣の人や近くにいる人、職場の人、友達を大事にしようということがメッセージに入ると良いと思った」「もっと大人も子どもたちも誇りをもっていくことが必要」また、資料1の2ページ「5 サービス利用者の視点」というところで、第三者が良いと思うサービスの提供ということを考えると、サービス評価が重要になってくるのではないかと思います。

次に資料2-1の具体的な施策の展開の、地域における子育て支援サービスの充実について議論しました。

主に学童についての意見が多かったです。「小学校への接続が一つのテーマである」という発言がありました。「小学校だと生活の時間ががらっと変わる」と、「習い事の接続もうまくいかず就労をあきらめるケースもある」と、「放課後児童クラブの利用者を増やすには、小学校に進学するお子さんに子どもの送り迎えなどをするサービスが必要」「市で何らかの子育てしやすいまちにすることが必要」と。また、必ずしも皆さんが学童保育に通えることではないということで、「低所得者の人たちも入りやすい家庭への支援、それから施設への支援が必要なのではないか」ということでした。「利用が増えると労働人口も増やせて、賃金を得られるまちになるのではないかと」。

また、今年度から試行実施されております「こども誰でも通園制度」についてもお話してもらいました。委員でいらっしゃる川村先生のききょう幼稚園でもやっています。「リフレッシュ需要は相当高い。子どもが生き育てやすいまちづくりには必要な制度。毎日ほぼ埋まっている」とのことでした。ニーズは非常に高いということです。

また、「函館市以外の人から見て子育てしやすいまちということアピールすることで、市内にいる人にも気づいてもらえる」また、「子育てにやさしい企業であるということのお墨付きを与える等の方法で、まち全体で子育てにやさしいまちということをアピールできるのではないか」ということでした。

次は保育サービスの充実について協議しました。実際に子をもつ親御さんからのお話で「子どもが公園で遊ぶときにボール遊びがだめだとか、安全に遊べない場所がある。安全・安心に元気で遊べる場所が限られてきているのが現状である。遊べる所をつくってほしい」とのことでした。

このような意見が出ましたということでAグループの報告としたいと思います。様々な意見が出ましたけれども、皆さん真剣に子育てしやすいまちづくりというものに対しての意見をたくさんいただきました。細かい意見については、事務局でまとめて皆さんに共有できると思いますのでよろしく願います。

【池田会長】

ありがとうございました。それでは、Bグループの検討の結果をお話したいと思います。基本理念については、全体協議の中で玉利副会長と木村委員からお話があり、そのとおりだと思ったので、話し合いはしておりません。

ページの量もAグループより多いので、早速、具体的な施策の内容に入らせてもらいました。

まず、資料2-1の14～15ページの子育てサロンについて、「あまり周知されていない、もっと周知してほしい」という意見がありましたし、「利用できる時間、運営方法に課題があるのではないか、お昼時間のときに開設していたりして、なかなか利用できないということもあるので、運営方法を考えていく必要があるのではないか、それから、人があまり来ていないというところもあるので、そこも考える必要があるのではないか」という意見が出ました。

また、「子育てアプリの利用が少ないということは周知が徹底されていないのではないか、そこも考えてもらいたい」という話もありました。

また、16～17ページにあるコミュニティ・スクールについて、「町会と地域がうまくいっているところもあれば、なかなかうまくいっていないところもあるが、各学校と連携しておおむねうまくいっている」というのが小学校長会、中学校長会の先生の意見でした。これはそのまま進めていって、うまくいっているところの例を参考にしながらやっていけば良いのかなと考えております。

また、私から、「昔は西中、青柳中、宇賀の浦中の3つの学区に分かれていたんですけども、今は1つになって範囲が広がっていることでどういうふうになっているんだろう」と質問を投げかけました。山口委員から「青柳ネットはコーディネーターが活躍していて成功している例ではないか」という話もありましたので、うまくいっていないところがあるなら

ば、こういうところも例にして市として手を差し伸べていけば良いのではということです。

続いて、18ページからの子どもの居場所について、「校区内に児童館があれば子どもたちが利用できるのではないかと、1校区に1つの児童館ということも子どもの居場所づくりには必要なのではないかと」ということです。児童館が遠い所にあるために1人で行けない、友だちが行かないと行かないということになるので、校区内に1か所児童館をつくってもらいたい。この児童館をつくるというのは、木村委員から「神山町会が最後で、児童館をつくるのに7年もかかったからこれから児童館をつくるのは難しいのではないかと」という話もありましたが、子どもたちの居場所をつくって、本当にそれをやるのであれば、ぜひ各校区内につくってもらいたいということ。また、「児童館が古くなっているので児童館の建て替えも必要になるのではないかと」。それから、子どもたちが居場所として利用している図書館と児童館が連携できればそこも居場所づくりになるのではないかとという話もありました。図書館に児童館の機能をもたせるといことも検討したらどうかということでした。

それから21ページからの非行といじめについては、教育委員会でも力を入れているということで、非行やいじめは減っているが、小学校・中学校で不登校は増えているとのことでした。

また、いじめに対するアンケート調査の概念も変わってきて、本人がいじめを受けたと感じればいじめになるんですね。ですから嫌な言葉を言われたから本人がいじめだと感じればいじめになるということもあるということです。また、不登校がなぜ増えているのかということについては、スマホ使用などによる昼夜逆転、家庭の問題といった要因があると。学校でこれらの生徒に対応するのは難しいというのはあるけれども、Google Meetなども利用しながらやっているとのことでした。

通信教育にも力を入れているところもある、また、地域包括支援センターでも不登校の子どもたちに対応しているところもあるとのことなので、そういったところやフリースクールの活用も視野に入れながら検討していく必要があるのではないかとのことです。

それから、28ページ以降の喫煙・飲酒については意見は出ませんでした。

最後に、「市内のレストランで離乳食を提供できないのか、子どもの世話に時間に活用する家庭もあるのでは。そのために市としてレストランと話をすることも必要ではないか」という意見もありました。

すべての委員がお話をしてくれましたので、有意義な会議だったと思っております。

これで今日のグループ協議は終了したいと思います。皆さんからいろいろな意見が出ましたけれども、これらを市で検討して次回の会議で回答が出てくることとなりますのでよろしくお願ひしたいと思います。

3 その他

【会長】 委員の皆さんから何かありますか。

(質問・意見なし)

これで本日の会議は全て終了いたしました。事務局から何かございますか。

【事務局（蒲生課長）】 皆さまありがとうございました。

本日、ご自身が所属していないグループの施策に関するご意見等がございましたら、会議終了後、1週間程度をめぐりにお受けしたいと考えておりますので、EメールやFAX、電話でも結構です。事務局の方にご連絡いただければと思います。

次回の会議についてでございますが、委員の皆さまには、あらかじめお伝えしておりますとおり、10月28日（月）に開催する予定です。開催が近くなりましたら、書面にて出欠の確認をさせていただきますのでよろしくお願いいたします。

以上でございます。

4 閉会

【会長】 ありがとうございます。以上をもって令和6年度第2回函館市子ども・子育て会議を終了したいと思います。皆さんお疲れ様でした。ありがとうございました。

グループ協議要旨（Aグループ）

1 委 員

- 天野委員 (函館保育協会)
 川村おさむ委員 (函館市私立幼稚園協会)
 高野委員 (函館市ファミリー・サポート・センター)
 玉利委員 (道南地区私立幼稚園連合会)
 成田委員 (公募)
 西村委員 (函館商工会議所)
 浜委員 (北海道函館児童相談所)
 本田委員 (函館大学)
 吉増委員 (函館市学童保育連絡協議会)
 欠席：川村幾代委員 (函館短期大学)
 ※ () 内は所属団体

2 会議録

発言者	発 言 要 旨
-----	---------

資料 1 計画の基本理念等（案）

【玉利副会長】

この部分について、冒頭お話ししましたが個人としては、こども計画をうたうなかで、現状、少子化については、外して考えることはできないのかなと思います。

すべての子どもたちという考え方は大事なんですけども、子どもたちを増やすという方向性もしっかりもった理念でどうかなと思いました。誘導するわけではありませんが皆さんどう思いますか。

【川村委員】

まず、「ひかり輝く」とありますが、ひかり輝いていると思えますか。僕は10年前に函館に戻ってきているんですけども、「生き生きひかり輝いている」とはこの10年間思っていないです。コロナもありネガティブになっちゃって、やっと観光客も入ってきて経済も復活してと。とある市議会の方が、函館市民は函館をあきらめているという声が、函館の議会の方がおっしゃっていたと耳にしています。あきらめている方が多いんですよ。だから、どうやったらひかり輝くか考えなければなりませんし、個人的な話なんですけれども、当園では、ハワイ州のマウイ郡とオフィシャルで姉妹提携してまして、コロナの3年間を除いては毎年マウイ郡のメイヤー（市長）とかハワイ州の知事とお会いしているんですけども、今年も国際交流に行っています。とあるレストランに入って、その人が来てた制服を見てこれが自分たちの誇りなんだと思うのが、制服に“Lucky Live Hawaii”と書いてました。ハワイに住んでいて幸せと。私たちのマインドは“Lucky Live Hakodate”ですかと。大人がそういう気持ちをもたないと子育て支援はひかり輝

かないと思うんですね。だからこそ、「生き生きとひかり輝いていく」は良いんですけども、市民全員が輝かないと子どもたちも輝けないですし、子どもたちが夢をもたないまちというのは、玉利先生がおっしゃっていたように少子化が進んでいくしかないの、理念の中にどうやって市民一人一人が自分たちの住んでいるまちに誇りをもって働いて住んで子どもをつくって育てていけるかということを考えるべきだと思うんです。ですから、我々子どもたちを預かるインフラの業界と、前回の会議でも申し上げましたけれども、人を雇う企業側もそういうことを考えないと。確かに企業は決算があって利益を出すのが大変だと思うんですけども、人を育てて人を育むということを考えないと企業の利益は続いていかないとと思うんですね。だからこそ、この基本理念、子どもだけではなく、市民一人一人もっと強く何か入れていかないと少子化も止まらないと思うんですね。だから函館に生まれて育て、住んで幸せという言葉も絶対に必要なんじゃないかなと僕は思います。

【玉利副会長】

僕が冒頭言ったことの理由というのが、「すべての子どもが」という言葉なんです。子どもがひかり輝けるまちなら良いんだけど、「すべての」というのが気になる。気になる理由というのが、子どもたちは基本的に輝いているんですよ。けども、「すべての」ということは、どこにスポットを当てているかという「輝けない子どもにも」という部分を濃く感じるんです。それは大事なことはあるんだけど、ここで子育てしたいとか、ここで子どもを生みたいと考えたときに、このまちはひかり輝く子どもを生むことにスポットを当てているから、ここで子育てしたいと思って移住・定住したりとか、子育てしてくれる場を選んでくれるかといったら必ずしもそうではないと僕は思うんです。だから、よりひかり輝くものでなければそういった魅力あるまちにならないと。この「すべての子どもたち」という表現よりかは、一般的に「子どもたちが輝き」というふうにして限定しない方が良いのかなと思うのですが、意見を押し付けるわけにはいかないの、大学の先生もいらっしゃいますから本田委員、ここの読みはどうですか。

【本田委員】

私は臨床心理士でカウンセラーとして、様々な困難を抱える子どもたちと関わる機会が多いので、一人も取り残さないという意味での「すべての」という用語があることの、意味とか価値があるんじゃないかなと感じて、今お話を伺っていました。

ただ、子どもが輝くためには大人が輝くという視点はすごく大事だと思ったので、基本理念 I（資料1の1ページ）の部分に子どもも大人も夢や希望をもって輝いていけるというような、すべての子どもだけではなく、大人や市民みんなが輝けるというようなニュアンスが入って来るとメッセージ性が強くなるのかなと思いました。

また、自分らしさや個性や多様性が尊重されるというようなニュアンスが、最近は求められているのでそういった要素も入

ると良いなと考えていました。

【成田委員】

大人がそもそも函館を好きになる、愛せるというのがすごく大事だなと思って、小学生の子どもがいるんですけども、4年前に函館に引っ越してきたんですね。そのときにまちが汚いなと思ってしまった。大人はポイ捨てしてて、すごく気になったんです。前に住んでいた所がきれいで、皆さん街路樹であったり、自分の近所をすごくきれいにしていたり、周りの人が声をかけてくれてゴミ当番も一緒にやったりとかそういう温かい地域だったので、函館に来た時に、まちが汚いし寂しいなと思ったところがあって、自分でどうしたら良いかと思って、町会に入ったり、子どもと一緒にゴミ拾いに参加して、そうしたら気持ちが良いね、住みやすいね函館、とそういうところから始まりました。もう少し、大人が函館を大事にする、隣の人を大事にするというのが一歩なのかなと思って、大きく考えるのではなくて、大人が隣の人や近くにいる人、職場の人、友達を大事にしようということがメッセージに入ると繋がっていくのかなと感じました。

【天野委員】

今のお話で、前のまちはきれいだったとか、マウイのようにアピールできる部分と函館との違いを聞きたいと思いました。

【川村委員】

まずマウイはゴミがないんです。あそこはビーチが観光資源で島民がそこを汚さない、あとはサンオイル、石油化学由来のものはアメリカで一番最初に使用禁止にしています。これはなぜかというとなんかサンゴ礁と海の生態に悪影響を与えるからということでハワイ州の中でも一番最初にマウイの行政が禁止したという経緯があります。だから自分たちのまちに誇りをもって、自分たちは何をもって収入を得ているかという考え方がしっかりされている。行政の啓蒙の仕方も強い。ゴミの問題は、今年西桔梗方面は汚い。ゴミゼロプロジェクトをやっているんですけども。去年マウイのメイヤーと意見交換したときに、来年来たら専門家に会わせるということで、今年、マウイのリサイクルとゴミ担当の方にお会いして2時間ミーティングしてきました。やはりゴミを捨てる人はゼロではないと、ただ、私たちがどうやったら良いか、アイスランドと一緒に精神的なメンタル的な部分からアプローチをかけていると、向こうはゴミ処理のリサイクル担当のトップが博士号をもっている大学の先生で、担当者は修士をもっているプロフェッショナルなんです。だから技術ではなく精神からアプローチしてどのような啓蒙をして活動していこうか、それは自分たちの島を守ると。自分たちの住んでいるまちに自負があるんです。我々も自負があればゴミは捨てないですよ。西波止場の方に行っても観光資源なのにゴミが多いですよ。だから我々も幼児教育をしていますから責任はあるんですが、もっともっと教育して、大人も子どもたちに倣って、価値観をもって、函館が何をもって成り立っているまちなのかということ、我々も然り、学校教育も然

り、行政も然り、教えていく必要さがあると思うんですよね。これは1年2年でできることではないと思うんですよ。まちを愛する、まちに誇りをもつというのは、自分たちのまちを一から見直して自分たちのまちが何なのかということの原理原則をわからない限りはいかない。マウイはそういう人たちがたくさんいらっしゃるというその違いだと思います。

【玉利副会長】

外からどう見えているのかというところは、2ページの「5サービス利用者の視点」で、「情報公開やサービス評価などの取組みを進める」とありますよね。そのサービス評価というのは非常に重要で、いろんな施策を打っている、その評価が正しいかというのは、心配なんですよね。これから実際にやっていくものを考えるうえで、果たしてその利用率で良いのか、なぜその利用率なのかとか、学童保育の利用率が5割を超えているところを何で8割にもっていく努力をしないのかとか、みんな小学校に上がったなら学童に行くという社会にして進めようというような評価になぜならないのかなと思う。そういった評価の視点を今後市としてどのようにつくっていくのが非常に重要なのかなど。だから、ゴミが気になるということをしっかき評価できるかということが函館市の問題の一つでもあるかなと感じます。だからそのような質問が出るんだと思う。

【天野委員】

子どもや大人の背景に焦点を当てたときに違いを捉えてどのように活かしていったら良いのかなと率直に聞いてみたいなと思ったところでした。

【成田委員】

私は弘前で出産・子育てをしていたんですけれども、郷土愛がすごいんですよね。ねぷたまつりがありまして、幼稚園の年長さんになると太鼓を叩いて練り歩いたり、小学校に入ると地域で笛とか太鼓を練習する所もあったり、授業でもやったりするので、ここで生まれて育ったという誇りが自然と身につけてきて、大人も夏になったら心が躍るような祭りになって、まちに活気があって、リンゴとか特産もあって郷土愛があるんです。函館に来てゴミがあるのも気になったんですけれども、ここ1、2年は朝散歩していると拾ってくれているおじさんが現れたりして、ちょっとずつ変わってしまっていて、個人個人でまちをきれいにしようとする人が現れてきてくれていて、ありがたいことなので自分は継続してやらなきゃいけないなというところはあったんですけれども、何が必要かという教育だと思うんです。小さい頃からゴミを捨てないとか基本的なこと、友だちを送迎とかで車に乗せたときにゴミを捨てていく子もいるんですよ。親のしつけがベースにはあると思うんですけれども、ゴミが出たら持って帰って自分の家で捨てる、じゃあそのゴミどうしているのと聞いたら、お母さんがピンクのゴミ袋に入れたり分別して捨てていると。4年生になる娘も学校でも習ってきて、「お母さんこういうときはこういうふうに出すんだよ」とか逆に教えてくれたりとか、やはり教育の力は大きいなと

思っています、そういうところなのかなと思っています。

資料 2-1, 2-2 具体的な施策の展開 (前半)

施策の方向 1 地域における子育て支援

1 地域における子育て支援サービスの充実

【玉利副会長】

次に「1 地域における子育て支援サービスの充実」に入ります。何かご意見ある方はいらっしゃいますか。

【川村委員】

今我々の業界で一番問題となっているのが小学校接続というテーマなんです。幼稚園・保育園から小学校に上がる時に子どもたちの引継がうまくいかないということと、逆の局面からいうと、親御さんが幼稚園・保育園に子どもを預けていて小学校に行くと、生活の時間ががらっと変わってしまって、保育園・幼稚園は一時預かりがあって夜 6 時半～7 時くらいまで預かれるんですけども、小学校は帰らせてしまいますよね。習い事だとかの接続がうまくいかない。ここで親たちが就労を諦めてしまうというのが実際に出ています。ですから、6 ページに出ている放課後児童クラブの利用をもっと増やすためには、例えば習い事とどう接続するのかとか、もう一つ、経済界との話になってしまうんですけども、小学校に進学するお子さんをもつ親御さんたちに、ちょっと仕事を抜けて子どもを送っていくとか、塾の送り迎えができるとか、というようにやる世の中が必要なのかなと。それで函館市が、ここが子育てを頑張っている企業だということで、地方税を安くするとか財源とかの問題になるかもしれませんが。そのような子育てしやすいまち、企業も協力しているというようなことも必要なんじゃないかな。そうすると学童の利用率も自ずと伸びると思うんですよね。親たちも幼稚園・保育園にいるときは子育て支援が手厚かったけども小学 1 年生になったら大変で送り迎えもできない、だから仕事もできないとなると本末転倒だと思うんですよ。ですから、ここも合わせたサービスも考えていく必要があるんだろうなと思います。

【吉増委員】

よく 1 年生の壁と言いますけれども、やはり金額がそれぞれのクラブで違うので、母子家庭なんかは今まで保育園・幼稚園で掛かっていなかったものが掛かるようになるんですね。それで払えないから学童には預けないとか、そういう声が聞こえてきていて、函館市から 6,000 円の学童保育料の助成はありますけれども、それでも入れられないと。それぞれのクラブの金額の設定があるので、そういうところでは躊躇してしまうということもあるんですね。学童も委託されてやっているところですから人件費も掛かりますし、それなり的人数を入れてくださいというようになっていますので、それをペイするのが大変だというのもあって、人を雇えないということも現実的にはあるので、委託金とかも考えていかないときっと学童に入れるという

ふうにも考える親も少ないのかなど。公園で鍵をもって遊んでいる子もいるので、それも心配だし、おじいちゃんおばあちゃんに面倒をみてもらっているというのが多いと資料に書いていて、1・2年生のうちは良いんですけども、3・4年生くらいになると行動範囲が広がるのでおじいちゃんおばあちゃんも見きれなくなっちゃうんですね。なので、そういうところも考えて、例えば幼稚園・保育園と一緒に、収入で保育料を決めるといようにしてもらえると低所得者の人たちも学童に入りやすくなるのかなと思います。

【玉利副会長】 職員の処遇も考えてほしいですね。

【吉増委員】 そうなんです。ずっと据え置きで何年も上がっていないので。

【玉利副会長】 施設に対する援助も必要だし、そこに通う子どもたち、家庭への援助の両方が強化されれば利用率が上がってくるということですね。

【吉増委員】 私は何年も思ってたんですけども、保育園・幼稚園と同じで保育料を所得とかで決めてもらえればきっと入りやすいんじゃないかなど。ここは各クラブでの裁量になっちゃうので、そういうふうにしてくれると助かるなと思います。

【川村委員】 各クラブの利用者が増えれば労働人口が増やせるという部分につながるので、先ほど言った賃金を得られるまちなるはずなんです。ですから中途半端なことは中途半端でしか終わらないから徹底的にそこも考えていくべきですね。

【吉増委員】 若い人たちも働けるような場所っていうのかな。若い人たちは函館に残らないじゃないですか。だから、働けて収益を得られて子育てができるような企業があれば良いのかなと思います。

【玉利副会長】 浜委員は前回の会議でショートステイの質問をされていたかと思うんですけども、この辺について、何かありますか。

【浜委員】 私が質問したものについては、回答が出されているので、この部分については、すぐには難しいんだろうなどは感じているところなんですけれども、今日の議題のところとしては、先ほど他の方からも出ていましたけれども、放課後児童クラブを経済的な理由で使いたいけど使えないという人もいるというところで、きちんとニーズが充足されているのかということがわからない。4ページで入所率が出ていますが、実際に希望されている方が全員入所できているのかということがこれだとわからないんですよ。

【玉利副会長】

ニーズの分母がわからないですからね。

【浜委員】

そうです。先ほど金銭面のことでためらう方がいると伺いましたけれども、放課後等デイサービスとかだと利用者が増えていたりとか、学校まで迎えに来てくれたり送迎してくれたりとか利用者に寄り添っていて、低所得者の方は利用料が少なかったりとか、そういったところも配慮されているから利用している人も多くなっているんだろうなというところはあるんですよね。ただ単に増やせば良いという問題ではないし、実際に働いている職員が辞めてしまうと子どもを受けられないですし、大局的な見方をしないと何も進んでいけないんじゃないかなという危惧は感じています。

【玉利副会長】

ショートステイを使ったことがある方はいますか。いないですよ。

今の状態で安心して子どもを預けられない。利用料の低さゆえに安心できない。本当に必要であれば1万2万を払ってでも、その日預けると思うんですよ。でもそういったサービスは今のところないんですよ。きちんとした安全を担保して、保護者にそれなりの利用料を払ってもらってというシステムではないのかな、考える余地があるのかなと思いました。

【高野委員】

どうしても誰もみてもらえないからとファミリー・サポート・センターに相談がきたときにショートステイを紹介したことはあります。その後預かったかというのはわからないんですけども紹介したことはあります。

ファミリー・サポート・センターでは基本的に宿泊は行ってないんですけども、前に、ずっと小さい頃から預かっていたお子さんがいて母子家庭だったんですね。それで、お母さんが手術しなきゃいけないくて、何日かみてほしいとなって、それまでおばあちゃんがみてくれていたんですけども、病気で亡くなって、誰もみてくれる人がいないということで、小さい頃からずっとみていたので、お母さんが入院して難しいときに、何日か宿泊でお預かりしましょうということで預かったことはありました。その方は小さい頃から預かっていて信頼関係ができていたからお預かりすることができたんですけども、ファミリー・サポート・センターで全部預かることは難しいです。

また、夜10時くらいでもお預かりできますよという方がいれば預かることはできるので、コロナの前は仕事の付き合いでどうしても忘年会にということで預かったこともありましたし、美容室に行きたいとか気分転換とかリフレッシュにどんどん使ってくださいと言っているのも、上手に使っているお母さんの方もいらっしゃいます。

【玉利副会長】

そうしたニーズにこたえるためにこども誰でも通園制度が保育園・幼稚園で始まりました。今年度試行実施しているところですが、川村委員のききょう幼稚園で実施していますので、ど

んな内容か簡単に説明いただけますか。

【川村委員】

0～2歳のお子さんで、通常、保育園を使うのは保護者全員が就労しているんですけども、お父さんがいて、お母さんが働いていない方は今まで0～2歳は預ける施設がなかったんです。これを預かりましょうというような国の試作的な事業です。実際のところ、かなりの高い確率で予約が入ってしまっていて10月までいっぱいという状況で、今おっしゃったリフレッシュとか、離乳食をどうやったら良いかということで子どもを預けに来て相談するとか、子育てに悩んでいらっしゃったり、リフレッシュという目的で使われている方が多いです。アンケートの結果に出ているように、初めてのお子さんをどう育てたら良いかということで、子育てでこんなに悩んでいらっしゃるんだなというところが4月から約半年行ってみて顕著に出ているのかなと。リフレッシュ需要は相当高いです。先ほど高野委員がおっしゃったとおりリフレッシュされることによって自分の時間をつくれます、次の自分の子育てとか就労に向き合えますというようなかたちでは非常に重要な施策だなと感じています。我々も徹底的に保護者の子育て支援をしていながら、今函館市が決めようとしている、子どもを生んで育てやすいまちづくりには、こども誰でも通園制度は重要な制度なんだろうなと感じております。

【高野委員】

10月くらいまでいっぱいということは、お願いしてもごめんなさいという感じですか。

【川村委員】

最近では2か月先の予約も入るようになって早すぎるということでコントロールするようになりましたが、ほぼ毎日埋まっています。

【高野委員】

ファミリー・サポート・センターの会員も、誰でも通園制度に頼んでもいっぱいだったのでということで、こちらに連絡してくる方もいました。

【玉利副会長】

利用要件をとりはらうことが必要なんです。要件を下げる并使用やすくなり、使えば質も上がるのかなと思います。

【吉増委員】

子育ての質問を結構してくるということは、自分の周りに聞く人がいないとか、核家族化しているので近所付き合いもないということですね。

【川村委員】

うちの若手の職員に聞いたら、ネットの情報は信頼しないらしいですね。誰か信用している人からの声を信じるんです。ネットは情報が錯綜しているのでどれが本当かわからないみたいですね。だから預けに来て当園の担当保育教員に相談したら良い答えが得られた、私に寄り添っている答えだということで、周りの人に恥ずかしくて子育てサロンだと聞かないらしい

です。一対一の保育教員に相談するケースが多いらしいです。

【玉利副会長】

国際ホテルはウェルカムベビーのお宿に認定されている。子どもがはいはいできる部屋を用意するというようなサービスなんですけれども、子ども連れで行ったときにホスピタリティが高い。そういった宿に対するサービス評価もして、質を上げていくという取組みをして、波及していけば良いのかなと思いますが、西村委員いかがでしょうか。

【西村委員】

函館市の場合は10人前後の少ない人数でやっている会社が多いと思うんですね。会社も大変な状況ではあります。同時に人が足りないということもあります。働いてもらいたいけど求人しても応募者がいないという状況も多く、働きたいけど働けない、働いてほしいけど条件に合う人がいないと、ニーズのバランスが難しいところであるんですね。そういうニーズを第三者的などところで調整できるような何かがあると、働く方も企業もより良い関係になって活性化していくんじゃないかと思っています。それが函館市なのか商工会議所なのかわからないですけれども。

【玉利副会長】

民間の取組みというのは非常に重要で、外部から来る人に対しても子育てしやすいまちをアピールすると自ずとそこに生活している人も生活しやすいまちになると思います。企業の場合は、サービスを提供しているところは子どもにやさしいサービスを提供するし、労働力として働いてもらうためには子育てしやすい職場環境にして、優良企業であることのお墨付きを与えて、子どもを連れて遊びに行ったら最高のまちみたいになると良いと思いますね。そういうランキングを見て旅行する人もいると思いますから。

2 保育サービスの充実

【玉利副会長】

次に保育サービスの充実について何かご意見ある方はいますか。

【吉増委員】

子どもが公園で遊ぶときに、ボール遊びを禁止している公園が多かったり、子どもが充実して遊べる所があると良いのかなと思います。ちょっとでも怪我や事故が起こると閉鎖になることもある。屋内の施設があると良いです。

キラリスだと小学生を連れていくと未就学児が多いので怪我をさせたらどうしようとか思っちゃう。

【成田委員】

児童館は平日でしたか。日曜日とかも使えるとボール遊びとかできて、一輪車とかもあるし。そういう所が開放されると良いですね。でも、職員の方もいらっしやらなければいけないし、難しいとは思いますがけれども。

- 【吉増委員】 もう少し子どもが充実して遊べる所があれば良いと思います。
- 【成田委員】 雨の日はゲームをして終わっちゃいますよね。
- 【吉増委員】 Youtubeやゲームが多いので小学生の眼鏡率もすごく多くなる。
- 【成田委員】 素朴な疑問なんですけど、段々子どもが減っていく中で、サービスを充実させるために、職員の方はある程度確保しなければいけなかったり、施設の数確保しなければいけないと思うんですけども、その場合はどういうふうになるのでしょうか。施設の数減らしていくと通うのに親の送迎の負担が増えたりする。
- 【玉利副会長】 子育てサービスを充実させるためには、一定数の子どもが必要で、生み育ててもらわなければならないし、外から魅力あるまちにする必要があると思います。
- 【川村委員】 我々民間は努力しますが、我々だけでは少子化は止められないというのが現実だと思います。
- 【玉利副会長】 いろんな施策サービスを見ているけど、絆創膏を貼っているような施策だけではなくて根本的に解決するような手を打っていないと魅力あるまちにはならないと思います。

グループ協議要旨（Bグループ）

1 委 員

池田委員（函館大妻高等学校）
 石坂委員（函館市医師会）
 数又委員（函館市民生児童委員連合会）
 木村委員（函館市社会福祉協議会）
 高橋委員（連合北海道函館地区連合会）
 館山委員（公募）
 野口委員（函館市小学校長会）
 畑委員（函館市町会連合会）
 山口委員（函館市中学校長会）
 山崎委員（函館市PTA連合会）
 ※（ ）内は所属団体

2 会議録

発言者	発言要旨
-----	------

資料1 計画の基本理念等（案）

（意見なし）

資料2-1, 2-2 具体的な施策の展開（前半）

施策の方向1 地域における子育て支援

3 子育て支援のネットワークづくり

【山崎委員】

子育てサロンは行ける時間帯が設定されています。例えば13:30～15:00ですとか、子どものタイミングによってちょうど昼寝の時間帯にあたると行けないという声が聞こえていました。

時間帯を増やすのは難しいかもしれないですけども、広がるとさらに利用されやすくなるのかなと思いました。

【池田会長】

利用回数が少ないのは利用時間に問題があると、運営方法を考えてほしいということですね。

木村委員いかがでしょうか。

【木村委員】

子育てサロンも10年前と今とでは違うので、新しいものに変えないといけない時期に来ています。

町会でも月に1回借りてやっているところもあって、見に行ったこともありますけれども1日に1人くるかどうかという状態のなかでやっています。誰もいないところで保育園の先生方が3人くらいで待っているのもと思うので、PRの仕方や時間帯について考えてほしいと思います。サロンも地域子育て支援拠点事業となっていますけれども、今は時代が違ってきてい

るような気がしている。町会等でまめっこサロンを実施しているとありますが、町会側でわかっていないこともあって、それは違うのかなという気がしています。いろいろな町会館が集まってやっているということも、あまり町会に話が出てこないこともあります。全般的にそうなんですよね。地域や関係団体との連携を図る・努めるというのは、いつ努めているのかといつも思います。5年ごとにいつも思うのは、「努める」「連携を図る」というけれども、いつ連携を図ったのか、どうしたのかというのが出てこないというのが私はいつも感じています。

【池田会長】

どうやって具体的にやっていくかということを決めていかなければならないということですね。

【高橋委員】

子育てサロンに行く前に仕事もしています。小学生になると学童とかデイサービスとかに行くわけですよ。保育は0～1歳児で幼稚園、保育所でのケアを厚くしたり、周知したり連携をしないといけないですよ。

すくすく函館っ子のアプリでさえ利用者が少ないです。保護者達はスマホを持ってるので、この利用率を上げて情報発信を強化するか方向性を変えていかないと。例えば、少子化だから地域に住んでいる子どもたちのネットワークというよりは、働いている場所の保育所に行くと思っています。そういったところのネットワーク全体は函館市が情報発信するだとかに変えていかなければならないのかなと思います。

【池田会長】

確かに共稼ぎの家庭が増えています。

次に16ページの「(3) 地域における子育て意識の啓発推進」です。小・中学校がどんどん少なくなっていて、校区の範囲が大きくなってきている。「地域とともにある学校づくり」とありますがうまく機能しているのでしょうか。

【野口委員】

コミュニティ・スクールにつきましては、中学校区の中で行われているものと、単独で動いているところがありますけれども、中学校区のところではお互いに情報共有しながらうまく進めているところもありますし、コーディネーター中心に配置されているところは町会とも連携しながらいろいろな活動をされている状況なので、うまくいっているところはあるのかなと思います。

単独でやっているところも、単独のなかで活動を工夫することによって、近くの幼稚園や高校、大学も含めて声をかけながら地域の中にある関係機関とどう連携していくかを中心に取り組んでいるところですよ。

【池田会長】

例えば、昔は西中、青柳中、宇賀の浦中があったが今は青柳中だけになって、宇賀浦の地域の子も青柳中に来るようになっている。そうすると広がってきてコミュニティ・スクールをやるのは難しいのではないのでしょうか。

【山口委員】

統合のときに「青柳ネット」というものができたんですけれども、西部地区の22町会が高齢化で機能していないところもあって、22町会をまとめるのが難しい状況ではありました。ただ、22町会から代表を出していただいてコミュニティ・スクールができました。「地域とともにある」ですから、地域の事業に子どもたちが参加していくということから始めていって、地域の人や町会の人から子どもが地域の昔話を聞いて学ぶ地域訪問の取組みも行われていました。

今「青柳ネット」は充実していて、コーディネーターがいるので地域との繋がりができている状況にあります。「青柳ネット」は進んでいるんですが、函館市内では、学校運営協議会はあるけど協議会の動きができてないところもあるんですよ。小・中学校で町会との取組みはやっているが、運営協議会の中ではそれぞれの取組みで終わっているというところもあります。ただ、取組み自体は年々進んでいっている実態はあると思います。

【池田会長】

課題はあるけど良い方向に進んでいる状況にあると。

4 子どもの健全育成

【池田会長】

子どもたちは児童館を結構利用していると思いますが、この辺はどうでしょうか。23か所は適正かどうか。

【野口委員】

児童館が校区内にないところもあります。本校だと3人以上だと行けますが、1人や2人だと学校の決まりとしては難しい部分があります。校区内に児童館があると拠り所にもなりますが、1人で悩みがあって児童館に行って身体を動かしたいというときに行けない、友達を誘わないと行けないという状況があって、校区内にないと良いなと思います。

【池田会長】

校区内に1つは必要で、それが課題だということですね。

【木村委員】

児童館はもう作らないと思う。最後にできたのは神山だけ、神山作るのに7年かかりました。児童館も委託事業になってきている現状からすると、受託者がどこまでできるのかが問題。学童保育所も1小学校に1クラブという基本が崩れていて、人口移動で1クラブだと足りず、北美原の方では2つも3つもできたりしているけども、いつかはそこもどこかは苦しくなっていくのだらうと思います。それを防ぐのにどうするかという問題も残っているんですけれども、小学校と学童との疎通、児童館との疎通が必要になって、最後は小学校の運営のなかで持っていけるかというところでは、小学校側では体力的にも時間的にもないだらうと。子どもの居場所とは何をもって居場所づくりとするかが一番重要なのかな。施設があると子どもが行くからそういう所が必要だという部分と、あるいは、ただ

開いているからといって行っても、何かあった時の責任はどうするかは明確化しないと、ただ預かっているだけでは施設としてどうかという気がする。

児童館の中に学童があるところもあるんですが、大きさにもよるだろうと思う。

【数又委員】

先日町会に市長が来て懇談会をしたんですけれども、町民から児童館が古い、老朽化という声があって、予算的に新しく立て替えてくださいとは言いませんけども、段々とお化け屋敷化しているという話がありました。自分が子どものときは、当時にしては立派な児童館ができて本を読むところや卓球台が3面くらいあったりと良いものができていました。

亀田交流プラザも図書のところでも中高生が勉強していますよね。冷房がついていて、自分の家以外で落ち着いて勉強できて、あのような所も居場所ですよ。

町会でも一時預かりみたいに宿題やって担当の方たちと遊ぶことをやっていたけど自然消滅しちゃいましたよね。

【池田会長】

町会の話が出ましたけれども町会連合会どうですか。

【畑委員】

私のいる方は人がいないし子どももいないですね。

石川町会では子どもが増えているから児童館ほしいといつも要望を出しているんですけれどもなかなか増やしてもらえないみたいです。校区に一つは欲しいと思っているんですけれどもそれは難しいみたいでなかなか実現しない。

【木村委員】

神山は小学校ができて20数年経過していますが、児童館の話は出しているけども、正式に申し込んでからできるまで7年、小学校自体も来るのか来ないのかもわからなかったから。

北美原小学校と桔梗小学校の大きい道路の真ん中に石川町会があるから大変なんだよね。新道を渡らなきゃいけないから。

【池田会長】

図書館と児童館で提携できないのかな。図書館との児童館の機能を併せ持ってもらおうとか。可能であれば良い、そうなると子どもたちの居場所になるのではと感じます。

次に21ページの「少年・非行・いじめ・不登校等に対する支援の推進」です。これはどうなんでしょうか。

【山口委員】

函館市教育委員会だとかいろんな部分と連携して、非行事案はものすごく減っていると思います。人数がいますので喫煙とかいろんな事案はあるんでしょうけど、過去に比べるとすごく減っている状況にあると思います。

【池田会長】

いじめも減っているの。

【山口委員】

いじめも減っています。ただ、いじめ調査が変わってきています。「嫌な思いをした」も調査項目にあり、結構な数書かれ

るんです。それを聞き取りしていじめか判断する部分もあるので認知件数は増えている可能性があります。ただ、実際にいじめがあったかどうかは、状況的にはあまり大きくもなっていない、減っているのかなという部分はあります。ただ、調査の中身が変わっているのでも、件数的には増えている可能性が非常に高いです。

ただ、不登校の生徒は確実に増えている状況にあると認識しております。

【池田会長】 不登校自体も減っていると思っていたが。

【山口委員】 増えています。函館市教育委員会から校長会に対し、各学校にサポートルームという不登校の対策をする教室を作って、不登校対策を強化しなさいというものが2年ほど前から行われていて、サポートベース函館が南北海道教育センターにできて、そういうところでも対策したりして、かなり強化して取り組んでおります。各学校の取組みが強化されているので、今後減っていけば良いのですけれども、今の段階では不登校が減っているとは言えないのかなと思います。

【池田会長】 うちの高校の不登校は少なくなっている。前は結構不登校がいた。今は生徒数が減ってきているからかもしれないけど。不登校でうちに来た子は目標をもってしっかりして、面談したりしてどんどん伸びている。うちの学校に来る生徒は少なくなっているから全体的に不登校が少なくなっている気がしたのだけど、増えているのね。

【高橋委員】 函館市の中学校の不登校の数は多いです。小学校はそうでもないけど、中学校は道内でも多いです。

たぶん不登校の子どもたちは高校の進学が進まない状況にあるから、ある程度勉強できる子は高校進学を選択肢もあるかもしれないけど、なかなか難しい状況にあるんじゃないかと思いますね。

【山口委員】 N高など通信教育のところもあって、そちらに進学するというのも広がってきている状況にあります。

【石坂委員】 不登校の子の約3分の1くらいが起立性調節障害といって、昼まで寝て、昼から起きて夜生活するタイプの子どもが3分の1を占めるんですよ。この子たちは心理的な指導をしてもどうにもならない。最初からそういう生活に合わせた体のリズムができていますので、これをひっくり返すのは難しいですね。

そういった子が将来的に高校生になると通信制とか夜学の学校に行くケースがよくありますね。最近では増えているので不登校の子が減っているというのはまずないと思います。

【池田会長】 道内の通信の生徒数は増えてるのですか。

【山口委員】 函館市教育委員会は小・中学校合わせて通信教育をかなり強化して取り組んでいます。

【池田会長】 今の対策の方法で、不登校の子が減っていく可能性はあるということですか。

【山口委員】 それは難しいかもしれないです。今話したとおり昼と夜が逆転している子が結構いて、朝夕で逆転しているなどいろんな家庭の状況があって、それを学校で直すのは難しい状況にあるのかなと思います。当然、ご家庭でも取り組んでいますし、放置しているわけではないですが、なかなか解決策が見いだせない状況にあるのかなと思います。

【池田会長】 どうやったら良いだろうか。課題は分かったけど、施策をどうしたら良いだろうか。

【山口委員】 いろんなケースがあって、学校に来れない子が学校に来れるようになったとか、午後から勉強できるようになったとか、そういうケースが増えているのは事実だと思います。

【池田会長】 そういう子も不登校になるの。月曜しか来ないとかも不登校に数えるのか。

【山口委員】 不登校は不登校だが、欠席報告というのがあり、その中で不登校生徒が各学校何人というようにカウントされるんですけども、来れない子が来れるようになった事例もすごく増えています。

【数又委員】 地域包括支援センターが10か所函館にあるんですけども、その中に自立支援の係をやっている社会福祉士がいて、講演会もやってくれました。ゴミ屋敷になってしまっている家や、お母さんが引きこもりで職についてない、お仕事できない母子家庭で、そうすると子どもが不登校になったりというのがあるので、どうして中学校に行くまでに誰かが支援できなかったのだろうか、もっと早く地域包括支援センターの自立支援係を使ってほしいという話をしていました。不登校の中学生に声を掛けたりいろいろしています。今までは南北海道教育センターや湯川小学校のふれあい学級しかなかったのが、今は各学校でも空き教室を使ってやってくださったりしているので良いんですけども、何で函館市は生活保護がこんなに多いのですかと前回の会議の質問でありましたが、生活保護世帯の子どもが大人になって再び生活保護を受けているというケースも多いです。

【山口委員】 今は時代が変わって、学校に行かないとダメではなく、一人一台の端末で授業を受けることができるなど文部科学省の7つ

の項目をクリアすると出席扱いにできると変わったんですよ。サポートルームに行ってその7項目をクリアできれば校長は出席扱いとして良いと変わりました。そういう時代になってきています。

【池田会長】

それも一つの解決方法かもしれないですね。
館山委員は何かありますか。

【館山委員】

不登校のところですが、学校に行かなくなる理由が様々だと思うんですよ。いじめだったり家庭の事情だったり、病気だったり、たまにだったら来れる、午後なら行ける子もいますし、学校ではないところで授業日数をカウントできるともなっているので、自分の意思で学校に来ない子もいるんじゃないのかなと思います。学校に来ない子が悪いという印象を与えるのは良くないのかなと思いますし、高校に進学するのが素晴らしいとか良い大学に行くのが良いとか、そうじゃないのかなと思います。難しいですが、そのような印象を与えない広報活動が必要なのかなと考えました。

【高橋委員】

例えばフリースクールもあって学校がすべてではないし、不登校の理由があって、生き方も様々で、どういふかたちで社会に出ていくかは非常に重要なことだと思います。

行政で函館市が居場所をやっているんだけど、どういったかたちで社会とつながっていくかということを支える居場所を教えたり、伝えたり、こういったことが人生の役に立っていくなどの情報発信に行政は努めなければいけない。また、そういったところに行けない、経済的な問題や負の連鎖、貧困の問題もあり、そういうところに何かしらのアプローチは行政としてすべきだろう、そのための発信の仕方、学校も不登校支援のチームを各学校に作ってやっているのだから、そういった方々も集まりながら支える場所が必要だと思っていて、それがどこにあるのかというと、例えば学童もバラバラだし、児童館もバラバラだし、それぞれバラバラなところがあって、各地域に拠点があれば良いのではないかと館山委員の話聞いて思った部分があるので、複合的な考えをしないといけない、バラバラだとお金も予算もかかることだと思います。

施策の方向2 母子の健康確保と増進（1～4）

【池田会長】

喫煙飲酒などは道をはじめ市も結構やっていると思う。食育についてもやってると思う。

【木村委員】

食育で前から言っていることがありまして、離乳食教室や啓発に取り組んでいますというけど、時代的にも、子どものアレルギーなどいろんなことが出てきている状況にあって、離乳食をマンネリ化しないためにも函館市内のレストランで離乳食を出せるような店づくりをお願いしてはどうかと思います。

す。赤ちゃんを大事にしてもらうためには、離乳食を出せる店があるかというところでは協力してもらえるところもあるのではないかと思います。

【石坂委員】

基本的に離乳食を作れとは言わないです。レトルトで非常に良いものがあるので、作る時間があれば子どもの世話をしなさいとよく言います。そういったものを有効活用した方が良いのではないかなと僕は思います。いろいろ意見があるので必ずしもそれが良いとは言えないですが、親も作る時間が大変みたいなので、小児科学会のなかでもそのように言う先生が増えてきていますね。